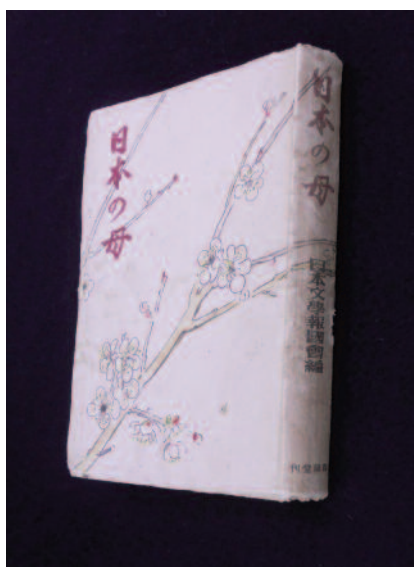


捨てないで!! の活動から 松尾を訪ねた川端康成

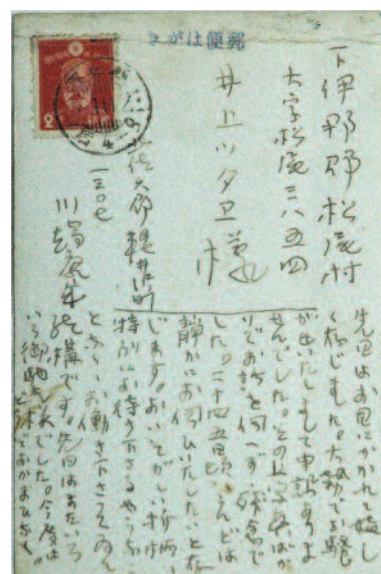
日本初のノーベル文学賞受賞作家の川端康成（明治32年～昭和47年）が、日本文学報国会の一員として戦時中の昭和17年10月8日と24日の二度に渡って飯田市松尾の戦争未亡人宅を慰問取材し、新聞に取材記事を書き、いたことは飯田下伊

那の人にも意外に知られていない。日本文学報国会は、第二次世界大戦の昭和17年5月、「国家の要請するところに従って、国策の周知徹底、宣伝普及に挺身し、以て国策の施行実践に協力する」ことを目的に設立された。会員になること

を拒否した中里介山、内田百閒以外は、旧プロレタリア文学関係の宮本百合子や蔵原惟人、中野重治たちも鳩合した大政翼賛下の新しい組織で、その年の夏には、各地を巡回して、「文藝報国運動講演会」などを開催していた。南信州地域資料センター「捨てないで!!」の活動で、その日本文学報告会の名前が背文字に入っ



日本文学報告会編『日本の母』



川端のハガキ

た本『日本の母』（春陽堂・昭和18年）が拾われた。

川端の「日本の母」は全集で読んだことがあったが、「読賣報知」の49回に及ぶ連載記事の一編で、かつ単行本になっていたことを初めて知った。本の「跋」によれば、この企画は「聖戦完遂の國民士氣昂揚を計るために」「農産漁村にあって、市井の巷にあって、

黙々と我児を慈しみ育む無名の母」を「全国津々浦々に尋ねて、日本の母として顕彰」するため情報局や軍事保護院などが後援し当代一流の文学者を総動員した一大運動だったことがわかる。

川端の取材を受けた戦争未亡人の井上ツタエさん宅を尋ねると、「出征中に生れた子供が、今年ももう六つになる。その美智代さんは、今も少し弱々しく見えるが、きれいな子である」と紹介された美智代さんが、母ツタエさんから受け継いだ川端の色紙やハガキを見せてくれた。10月21日付のハガキには「先日はお目にかかれて嬉しく存じました。大勢でお騒がせいたしましたお詫言訳ありませんでした。その上写真ばかりでお話を伺へず残念でした。二十四五日頃、こんどは静かに伺ひいたしたいと存じます。おいそがしい折柄、特別にお待ち下さるやふなことなく、お働き下さってゐて結構です。先日はまたいろいろ御馳走様でした。今度はどうぞおかまひなく」と実に川端らしい気遣いが感じられる。

「農産漁村にあって、市井の巷にあって、

「農産漁村にあって、市井の巷にあって、